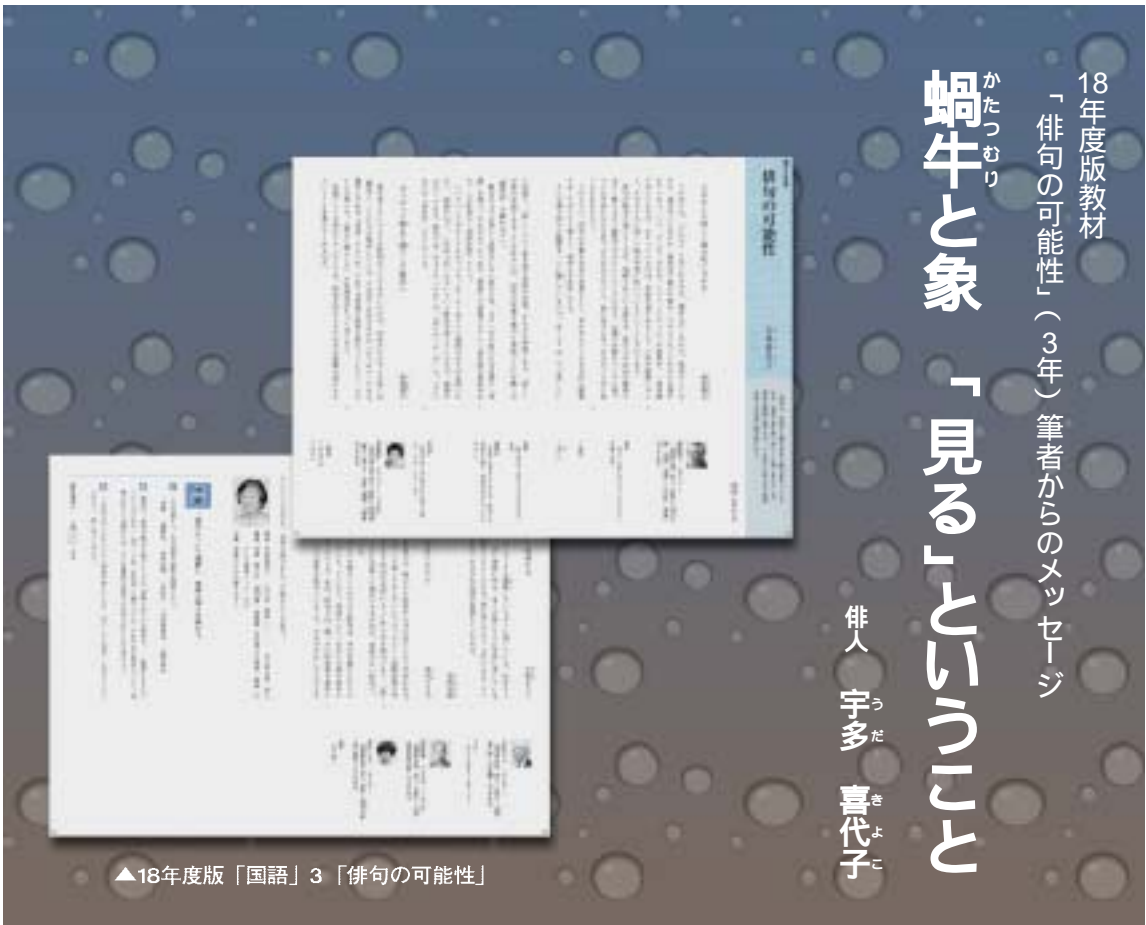


# かたつむり 蝸牛と象 「見る」ということ

俳人 宇多 喜代子



▲18年度版「国語」3「俳句の可能性」

かたつむりびびびびと目がのびる

小学二年生の女子の作った句です。ずいぶん前に目にした句ですが、今も蝸牛の角が伸びてゆく様子が眼前の景として見えてきます。こんな句に出会うと、あらためて「そうだ、そうだ、蝸牛の角はこんな風に伸びてゆく」と、雨に濡れた蝸牛のことを思い出すのです。

この作者は、蝸牛が殻から頭を出し、角を伸ばす様子を目のあたりにしてびっくりしたのでしょう。その様子をどう伝えていいのかわからぬまま、つい「びびびび」という自分流の擬態語でその驚きを表現したのでしょう。大人になって二度と生きた蝸牛を見る機会がなくても、この作者は「かたつむり」という言葉に触れれば、その形や生態を如実に思い出すにちがひありません。

そしていつの日か、「かたつむり」は漢字で「蝸牛」と書くのだということも知るでしょう。もしかしたら、何故こんな字を書くのかしらと思っかもしれませぬ。自分が子供の頃に「びびびび」ととらえたのは蝸牛の角。角を持つのは牛。カタツムリとウシは、ツノを共有していることで結ばれる。そんな解字を楽しむ日があるかもしれないのです。

灰色の象のかたちを見にゆかん

津沢マサ子

津沢マサ子さんにとって、象は「灰色」の「かたち」なのです。この印象は、「象」を見たときに頭に刻み込

まれたものだったのでしょう。「灰色のかたち」として認識された象、体の一部に目を近づけて皮膚の様子だけを詳しく観察した象、どちらも見たことに変わりはないのですが、私には「灰色のかたち」として見たほうに、あの大きな象を見た実感があるように思われます。

蝸牛を見た小学生が、「角の先の目」という細部から蝸牛の全体を認識したように、津沢マサ子さんは「かたち」という全体から象の耳や鼻や太い脚をとらえたのです。「象」という字が「すがた・かたち」を表す字であることを踏まえると、昔々の人があの巨体に「象」の字を当てたことに納得がゆくのですね。

俳句に少し足を突っ込むと、かならず「モノをよく見ること」という古参の訓示を耳にするようになります。けれど、こんなに難しいことはありません。細部にこだわれば全体がわからなくなるし、おおまかに見ていると細部がわからなくなる。

ところが実際には、蝸牛や象を見たことがなくても「見たよ」な気分になるのは、私たちの脳裏に、写真とか映像とか人の話とか詩歌や文章で触れた蝸牛体験や象体験が、いつしか本物以上の本物となって根を下ろしているからでしょう。

虚構のおもしろさを言語で書くという文学や文芸では言葉から広がる空想とか想像とか類推などを膨らませる楽しみがありますから、見たことがないものを「見たよ」な気分「にさせる」というのは、とても刺激的です。

私たちがいくらがんばっても、生涯に見ることのできるモノには限度がありますし、いくら見戻したと思っ

ても高が知れています。そんな限りある私たちの実体験を無限の世界に誘うのが言葉。そう思うと、言葉の一つ一つがとても大事に思えてきます。と同時に、いかに些細なものであっても、自分が見たり、聞いたり、触れたりすることのできるものは、自分のものにしておくことだと思つのです。

たかが蝸牛一匹であっても、類推の広がり、千の蝸牛、万の蝸牛、古生代のアンモナイトの世界、虫の誘う世界、母の誘う世界、などにまで及んでゆきます。

何かを見知るといことは、自分のためのインデックスを豊かにするということでしょう。インデックスは、後日、ある言葉に出会った時、自分の内部にひそむ言葉を引き出してくれます。「ものを見る」とは、言葉による再生原理なのではないか、と思つのです。

『「見」のまわりの「見」の意味を含み、「海」「島」「雪」などの構成要素となる。』

宇多 喜代子(うだ きよこ)

一九三五年生まれ。一九八二年、第二十九回現代俳句協会賞、二〇〇一年、第三十五回蛇笏賞を受賞。二〇〇二年には紫綬褒章を受章する。女流俳句史、古季語の経緯に関する研究、評論活動など幅広い活動を行う。主な句集に、『りらの木』(早稲俳句会)、『象』(角川書店)、『文庫』、『はくらの田』(深夜叢書)、『わたしの歳事ノート』(富士見書房)、『山ノ下』、『Z』(NHK出版)など。著者略歴。